

加藤辨三郎 述

浄土和讃

9

文責 本誌編集部



素直に念佛を称える

それでは二行目の「一切の有碍にさはりなし」について
もうしあげましょう。

有碍とは、さわりがあることです。さわりとは、煩惱熾盛、罪悪深重です。しかし「一切の有碍にさはりなし」ですから、そういうものが、一切さわりにならないということです。ふつう、いいことをすれば、佛さまは喜ばれて助けられる。悪いことをしては、お助けになるはずはない

と考える。まじめな人であればあるほど、こう考えます。南無阿弥陀佛を称えている人のなかにも、やはりいいことをした方がいい、悪いことをしてはいけないといった考えが、最後まで廃らない人が多々あるわけです。それはまじめな人です。一面はまじめな人ですが、本願を信じることについては、いささか信じ方が足りない。本願は、そういう者を一如平等に救ってくださる。それを信じ切る。それが真実信心なのです。南無阿弥陀佛、南無阿弥陀佛、これでもう一切の煩惱熾盛、罪悪深重も、みな溶かされる、

あるいは、そのままで撰取して捨てたまわらないのです。撰取して捨てたまわらないから、その御方を阿弥陀佛というように説かれているのです。しかし、撰取して捨てたまわらないようにするためには、どうしても因縁が生まれます。それがすなわち念佛です。み佛が念佛を授けてくださいます。それが廻向されるということです。その授かったお念佛を、素直にそのまま南無阿弥陀佛と称える、それが撰取不捨のきずなです。せっかくみ佛のほうからお手をさしのべてくださっても、念佛を称えないと、われわれのほうから、お手を拒むこととなります。南無阿弥陀佛を称えよ、しからば撰取するとおおせになつていられる。それにもかかわらず、念佛を称えないでいる。それはこつちの方が拒んでいゝること、はなはだ素直でないわけです。

念佛を称えると、その素直でないところが取れる。その取ってくださるのも本願力なのです。ついに念佛を称えるようにならせていただく。もうそれで撰取して捨てたまわらない。煩惱がじゃまにならない。死ぬまで欲も深い。それでもそのままおとがめにならないで、温かく撰取してくださる。こう感じているのが、光沢をこうむった人です。光の潤いを感じさせていただく。けれどもそれは、理屈では

わからないのです。本願を信じない者にはわからないです。本願を信じて念佛を称える人は、ありがたくちょうだいできるのです。

それが難思議です。「難思議を帰命せよ」であります。難思議とは阿弥陀佛の別号です。ゆえに「阿弥陀佛に帰命せよ」ということになります。「阿弥陀佛を帰命せよ」と「阿弥陀佛に帰命せよ」と、「を」と「に」で、昔から議論されているが、わたしどもが論をすることはありません。難思議とは、われわれ迷っている凡夫が考えてわかる世界ではないのです。わからないけれども信じさせてもらうんです。わたくしどもは、理屈でわかって、南無阿弥陀佛を称えているわけではありません。理屈で聞かれたら、答えられません。まったく不可称、不可説、不可思議というよりほかありません。けれどもありがたいです。事実、南無阿弥陀佛を称えると、心がなごむのです。潤いがおのずから出てくるのもうそではありません。

相手の心になつて

南無阿弥陀佛を称えている方で、妙好人といわれる方がいられます。妙好人の方がたと接すると、非常に潤いがあ

るのです。すぐ相手の心になって、そうでしょうとも、そうでしようとも答えられる。それが潤いです。まだお前はそんなことか、いつまでもそんなところで、うるちよろしているのか、というのはい潤いではないのです。潤いを感じている人は、おのずからに、ごもつともです、ごもつともです、わたしも、とても煩惱は捨てられません、欲も深うございます、それが素直にいえる。お上手をいうとかではなく、自然に出てくる境地です。

こういう潤いは欲しいものです。しかし実際はなかなかそうはいきません。戦争は、如来から見たら、もつとも悲しいことだろうと思います。一如平等、等しく如来の御子であるのが、どうして、大砲だ、鉄砲だ、爆弾だといってこだわらなくてはならないか。たとえ国であろうと、個人であろうと、それは、みなこだわりなのです。ひとつも光沢をこうむっていないのです。しかし、光沢そのものは照らしています。照らしているがそれを拒んでしまう。そしてみんなガタピシやっている。それにもかかわらず、潤おしてくださるのが光沢です。すぐ向こうの身になって考える。国ならば、相手の国のことを考える。ですから如来の目から見れば、そんなボンボン鉄砲を撃たないで、話し合っ

たらどうだとお感じになるのでしょうか。けれども実際には、そうはいかない。そうはいかないところに、われわれの悲しみがある。懺悔せざるを得ないものを感じるのです。

こういうことを、はっきり無碍光如来が説かれています。その無碍光は、煩惱熾盛、罪悪深重の者を妨げにしないで、そのまま救っていくのです。その光が光沢で、それを感知する。あるいは信知する。それが難思議です。宗教は究極に難思議ということがあるのです。すべてわかってしまうという世界は宗教の世界ではないと思います。わかってしまいう世界では、結局はうぬぼれになり、限度のある世界で、さっぱり味気ありません。ゆえに、一つの閉じこもった世界に閉じこめられてしまうことになるのです。

難思議に帰命するのは、理屈ではない。信じさせていただくことのできる世界、要するに信心の世界です。その世界に帰命せよ。別の言葉でいえば、南無阿弥陀佛を称えなさいということですが、それではじめてわたしたちの心に潤いのある世界となるのです。したがって、われわれの住む世界もおのずから潤いのある、いたわり合う世界、拝み合う世界が出現されると思います。

ただこれは、なかなか難かしく、何かそこに無辺際とい

うようなものを感じます。もうこれでおしまいだ、これで終りだというのではなく、行けども行けども行き着かない。だからといって、それではどうする。ほかに道はない。ただ南無阿弥陀佛を称えさせていただくよりほかはない。それが念佛の世界です。

そうちようだいするところが、前月述べましたように、有無を離れるも同じことになってくるのであって、これがほんとうに徹底すれば、生きてよし死んでよしということになります。決して破れかぶれの考えではなくて、生かさせていたでいてる命だから、生かさせていたでいてる間は、われわれの分を尽くし、いただいた命をフルに生かす。そうでなくては相済まないという心がおのずから出てくるのだと思うのです。

いただいた命

ですから、念佛の行者は、お百姓さんならお百姓をしな
がら、苗を植える場合も、一本一本お念佛の心で植えられ
るであろうとおもいます。それは本人は気がつかないけれ
ども、おのずからいいかげんにはなさない。おそらくちゃ
んと丁寧に植えていられるとおもいます。なぜなら、自身

も、苗も、ちようだいした命です。だから、もつたいない
ということが心の底から湧いています。ゆえに苗を植える
にも、いいかげんなことはできなくなるとおもうのです。
妙好人浅原才市さんは、下駄屋さんです。おそらく下駄
をつくるときには、いいかげんな下駄はつくれない。でき
るだけ自分の心を尽くした下駄を、おのずからつくられた
に相違ないとおもうのです。

念佛行者は、いかなる営みにおいても、いいかげんなこ
とでは済まされぬ。そういった心が、念佛行者には、お
のずから与えられる。それはやはり光沢に属するものであ
ろうとおもいます。お光を感じ、如来の恵みを感じ、いい

在家佛教臨増刊号 〈好評発売中〉

パトマ

定価千円 送料七二円

特集 限りあるいのちを生きる

現代人の直面しているテーマをとりあげて特集を
まとめた

かげんなことは、おのずからできなくなるのです。いいかげんなことをやるのは、つまり自分のはからいです。そのはからいをうるおして、すぐに、念佛のなかで、おのずから丁寧にさせていただくのです。

しかし現実には、なかなかそこへいきません。いかなのは懺悔よりほかはないのです。その懺悔も、また口で懺悔、懺悔といってもなかなかできません。そこに、南無阿彌陀佛もまたわれわれに代わっての懺悔の心であるということ、が説かれるゆえんなのです。南無阿彌陀佛は、一方においては浄土へ生まれさせていたるところの道ですが、同時にわれわれを懺悔させられる。自分で懺悔したとは、なかなかいえないし、実際にも、そういうふうを起こってまいりません。やっぱりこだわりがございます。すぐ言いわけになってしまふのです。言いわけは、外が悪くなって、あれが悪い、これが悪い、ゆえに、わしはこうなっていると、いうのです。言いわけでは懺悔でも何でもありません。ところが、この懺悔がなかなか難しい。懺悔ということは、經典には、ほんとうにわれわれにできない、というように説かれています。けれども、南無阿彌陀佛こそは、懺悔の心もふくんでおります。懺悔の心がおのずから与えられる

のか、それで南無阿彌陀佛を称えさせられるのか、そこは知りませんが、とにかくみ佛のほうから、いつの間にか念佛を称えさせていただく。すると、ほんとに懺悔の心も一から十まで、あれも懺悔これも懺悔、懺悔しなくてもいいものは何一つないというくらいに自分の至らなさに気づかせてもらう、そんな感じがするわけです。

なかなか理屈ではわからないのですが、南無阿彌陀佛を称えて、日常生活をしていますと、まったく予期しないときに、ああ、そうかと気づかせていただく。それがおのずから潤いになってくる。人生の潤いというのは、そんなところにあるのじゃないでしょうか。理屈だけの世界なら、潤いの反対だと思ふのです。

どうも舌たらずのようで恐縮ですが、これで第四句を終りにいたします。今回は第五番目の

清浄光明ならびなし

遇斯光のゆへなれば

一切の業繋ものぞこりぬ

畢竟依を帰命せよ

について感想を述べてまいりたいと存じます。